

「東大むら塾」が種まき、刈り取りをした村内産のそばも振る舞われました。参加した学生達の手打ちです。



東大むら塾
吉良倫太郎さん
飯舘村プロジェクト代表

学生の力だけで劇的に村を変えることはできません。けれど学生だからこそできることがあるのではないかと、外から来たからこそ気づける魅力があるのではないかと思っています。そして一番大切にしたいのは継続性です。代替わりしても、責任を持つて長期的に関わっていきたいです。

農業者等との意見交換会

農業委員会が、年度ごとに開いている「農業者等との意見交換会」。震災直後の厳しい状況においても、農業者が意欲を振り絞り、その時期その時期の取り組みや将来の夢を語り合ってきました。近年は実証の成果の共有や、事例の紹介にも力を入れています。



懇談会で振る舞われたのは、山田豊さん（農業委員／関根・松塚）が育てた黒毛和牛のローストビーフ。山田さんが避難中に勤務した京都市の精肉店が調理。極上の味わいに参加者が舌鼓。



相双農林事務所
農業振興普及部長
小久保仁子さん

以前から県内屈指の活動を行っていた飯館村農業委員会が、（震災後の避難を経て）現在もこのようなつながりを維持していることに敬意を覚えます。若い視点・外からの視点にも、大きな期待を感じました。また、13区営農組合の取り組みはモデルケースとなるもので、県としても協力していきたいと考えます。

交流から生まれた 風を明日への力に

学生の中には「村に一目惚れした。第二の故郷にしたい」という人も。村民が「大いに歓迎。村民から学ぶ姿勢を持つていい関係を築いて」「感動して涙が出そう。若い人が来て熱を発してくる。若いがうれしう」と応じていました。大学のつながりで、弘前大学、京都大学、佐賀大学の学生らも参加し、学生達が前日に「いいたて愚真会」と手打ちしたそばも振る舞われました。

そして、13区営農組合の報告も、先進的で学びの多いものでした。「他の行政区の参考になる」よく調整した。上飯樋の強さだ」と声があがりました。

菅野啓二会長(比叡)は盛会に感謝し「村民が安心して村に帰れるよう取り組んでいきたい。そして学生の皆さんには、村が頑張っている姿を世界に発信してほしい。これからもまでに付き合おう」と呼びかけました。



新しい事例の報告と意見交換が行われた後に、参加者が交流した懇談会の様子です。テーブルには軽食と飲み物の他、参加者が持ち寄ったそばやローストビーフが置かれ、フリートークに花が咲きました。村に関わる学生と大学関係者、農業者と農業委員が入り混じって、互いの取り組みや考えを語り合いました。

農業者等
との
意見交換会

age 参加は
18歳から79歳

11月3日に宿泊体験館「きこり」で開かれた、今年度の「農業者等との意見交換会」。村で農業活動を行う東京大学・明治大学・福島大学の活動報告、農業集団化に挑戦している13区営農組合の事例発表が行われ、参加者も意見を述べ合いました。続く懇談会では、新たな取り組みを行う若者と村の農業者が、さらに対話を深めていました。

